（４）てん菜の糖分向上と収量安定化について

中央、十勝、北見、上川各農業試験場

最近20年間に本道のてん菜収量は約2倍となり世界の最多収国となったが、逆に根中糖分は年々低下し、砂糖生産原料としての品質劣化が問題となっている。このため近い将来現在の根重取引から糖分取引制度への移行が予定されているので、収量水準の維持と糖分向上を両立させる栽培法を早急に確立する必要に迫られ本試験を行なった。

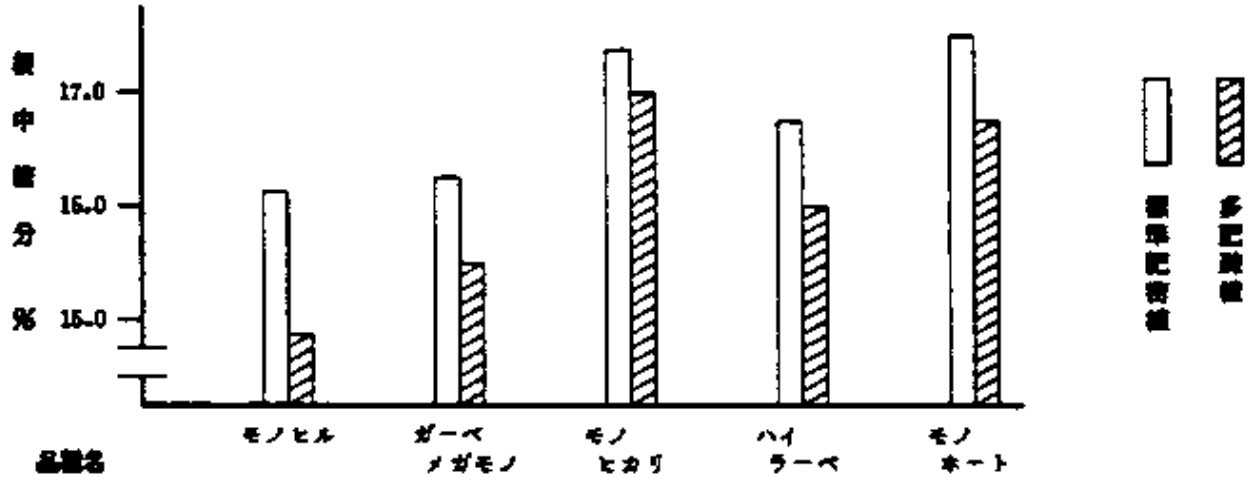
施肥量については、現在農家慣行の窒素施用量[1)]は道の定めた基準量より多く、糖分を低下させている最も大きな原因となっているので、積極的に施用量を減少すべきである。

またうね幅については、農家慣行の66センチ[2)]よりも60～50センチ程度に狭めると収量、糖分が向上することが多いことも知られた。特に直播栽培ではうね幅を現行より狭くする方が肥料の吸収利用や株同志の競合[3)]を考えると有利であることがわかった。

栽植本数については、10アール当り7,000本程度の確保が必要である。

品種については、窒素施用量、うね幅、株間に対する反応に品種間差のある[4)]ことがわかってきた。最近の高糖分新品種「モノヒカリ」は条件の悪いところでも糖分が低下し難いことが留められた。

なお、糖分及び品質の向上については、さらに検討が必要と考えられる。




1） 農家慣行の窒素施用量は１０ｱｰﾙ当たり役２４kg、道の基準量は約１５～１６kg

2） 各作物のうね幅はトラクターを共通的に利用するため６６センチとする事が多い。

3） 作物が繁茂すると光や肥料を互いにうばい合う現象。直播では株間が不規則となり易いのでこの現象が起き易い。

4） 従来、てん菜の品種は栽植密度、施肥量などの栽培条件に対し、いずれも同じ反応を示すものと考えられていた。

---

目次に戻る